

## 〈病〉と植民地の出会い

——芥川龍之介「南京の基督」論

孔 月

### 一 はじめに

「南京の基督」<sup>①</sup>は、一九二〇年七月『中央公論』に掲載された中国南京を舞台とした現代物の一つである。翌一九二一年三月に新潮社刊行の作品集『夜来の花』に収められ、さらにその翌年の一九二二年八月に作品集『沙羅の花』に収録される。

作品は二つの物語から構成され、〈病〉（楊梅瘡）を発端に展開される。一つの物語は娼婦金花が「基督の顔」に似た外国人と一夜を過ごしたことで、梅毒が治った話、その物語は金花の信じる「基督」による「奇蹟」の物語である。もう一つは、「日本の旅行家」（以下「旅行家」）によって把握される〈事実〉、つまり金花が会ったと信じている「基督」は、無頼な「日本人と亜米利加人との混血児」（以下「混血児」）の「George Murry」である<sup>②</sup>とを示唆する物語である。

これについて先行研究では、いくつかの解釈や議論がなされてきた。その一つは、「旅行家」の登場が、金花を中心に描かれた物語に対して如何なる位置を占めているのかについてであった。とくに、芥川の南部修太郎宛の二通の書簡の内容<sup>③</sup>から、「旅行家」が呈示した〈事実〉を手がかりに、金花の病が癒えたという設定を「完治」ととるか「潜伏」ととるかが議論の争点となった。そして、金花の物語の真偽を軸に、解釈が大きく二つにわかれる傾向が、「南京の基督」研究史の特色<sup>④</sup>となっていた。

最近の研究では、二つの物語のそれぞれが生み出される根拠は何かについて、従来軽視されてきた時代情勢と関連づける論<sup>⑤</sup>がみられるが、キリスト教信仰の問題の舞台を「南京」に設定したことに対して、まだ十分な回答を与えたとはいえない。本稿も時代との関わりを視野に入れているが、さらに踏み込んで着目したいのは、「南京

の基督」における〈病〉と「中国」の相関する意味である。そこで、テキストがなぜ中国の「南京」を舞台とし、そこに住む純粋な心の持ち主である年若い娼婦の〈病〉を登場させたのかを、作品の執筆期の一九二〇年代前後の中国・日本・アメリカの国際関係といった、政治的・社会的コンテキストとを照応させることによってあきらかにしていきたい。

## 二 金花の「奇蹟」物語―根底にあるもの

「南京の基督」は、「南京」を舞台にしているため、まず背景として、一九二〇年代前後の中国の政治状況を概観することからはじめたい。第一次世界大戦によって、日本は山東半島の旧ドイツ権益を中華民国政府に認めさせるが、パリ講和会議で、日本による権益の独占にアメリカが反対した。結果的に日本の山東半島の権益は認められたものの、中国では「五・四運動」が起ることになる。一九一九年の五月には、日・米・英・仏の四カ国による対中国の借款団が成立し、中国における権益をめぐる日本とアメリカなど他列強との競争、衝突、提携といった錯綜した関係が始まる。以上のような状況のなかで「南京の基督」は書かれ、テキストのなかには、随所にそのような中華民国の現実を意識している箇所がみられる。

テキストの舞台となる「南京奇望街」は、谷崎潤一郎の「秦淮の夜」の舞台を借りている。この奇望街（現在の健康路）は、秦淮の北側を走る実在した大通りであり、古代から続く芸妓の町として有名であった。中華民国成立後も文人墨客や外国人がよく訪れるところでもある<sup>9)</sup>。また「奇望街」という町の名前は、作品の主人公の「奇蹟」の物語に関わる「奇蹟」と「希望」を暗示する、いかにもこの作品にふさわしい地名である。あるいは芥川は「秦淮の夜」からこの町の名前を知り、そこからヒントを得たともいえる。

貧しい家計を助けるために、十五歳で「私窩子」（娼婦）となった宋金花は、客から梅毒（楊梅瘡）を移される。仲間から「誰かに移し返」せば治るといふ「迷信じみた療法」を教えてもらおうのだが、「怨みもない他人」に病気を移すことはできないと、五歳の時から信じてきた「羅馬加特力教」の教義を守って接客を避けてきた。家計が苦しくなっていくところに「西洋人か東洋人か、奇体にその見分けがつかない」「外国人」が、金花の部屋に現

れるところから、この金花の「奇蹟」の物語が始まる。

彼女はまもなく、この「外国人」が、自分が頼りにして生きてきた「基督様の御顔」に似ていることに気づき、「始めて知った恋愛の歓喜」を覚え、体を任せることになる。それは神の愛に身を任せるエクスタシーと重なる。翌日、彼女は梅毒が癒えたことに気づき、「外国人」を「基督」だと思いこみ、病気が癒えたのは、そのお蔭であると確信する。これに対して、金花の部屋を訪れた「旅行家」は、彼女の境遇には同情しながらも、彼女の（無知）を感じずにはいられなかった。しかし、それは金花の眼からすると、「外国人」＝「基督」の起こした「奇蹟」であつたのである。その根拠とは何かを説明するために、まず、金花の人物設定に注目したい。

「旅行家」が金花の部屋を尋ねてきたとき、「羅馬加特力教」の信仰をもつ金花が売春をすることに対して、「皮肉な調子の交つた」口調で金花を問い詰めると、金花は次のように答える。

「この商売をしなければ、阿父様も私も餓死をしてしまいますから。」（中略）

「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」（二三七～二三八頁）

この返答を根拠に、関口安義は、「人間の掟から解放され」た、「類いまれな素朴な信仰を抱いた、純な少女」<sup>(6)</sup>像を彼女に読みとり、芥川が熟読した『『新約聖書』の精神が反映』していると指摘する。たしかに、信仰の素朴な金花像を読みとれるが、それが何に由来するのかについては触れられていない。これについては、右の引用からでもわかるように、彼女の「基督」への信仰心は、「姚家巷の警察署の御役人」への不信から、逆に一層深まっていたものとみられる。「基督」は、売春する自分の境遇を「汲みとつて下さる」が、「姚家巷の警察署の御役人」はそうではないという比較から、味方になるはずの警察までが頼りにならないことへの金花の絶望が、この言葉に表れている。

自分の生きる現実への不信が、金花を現実世界から宗教的世界へと向かわせている。その背景には、辛亥革命後の政治状況との関連が暗示されている。民国政府は、欧米や日本帝国の操縦下で政權をたびたび更迭し、その

ため、いろいろな派閥が生まれた。このような派閥の重要人物や軍政要員などが妓館の常客であり、重要な軍事会議まで妓院で行われ<sup>1)</sup>たりした。金花は、そうした政府の高官たちの姿をみてきたといえよう。高官たちへの不信は、「姚家巷の警察署の御役人」をとおして表象されている。ただし、「姚家巷」にいる「御役人」に限定されている金花の不満は国家体制へのそれではなく、あくまでも個人レベルの問題にすぎないのである。幼少期にカトリックの洗礼を受けたこともあり、現実への不信が彼女の信仰を一層深めさせたともとらえられる。

### 三 金花のみた夢―「支那化」された「基督」

金花は「外国人」と一夜をともしにするが、その夜、「基督」に会う夢をみる。この夢は、金花の物語をファンタジー化する重要な要素であり、不思議な外国人の異世界性を「南京の基督」にまで化する仕掛けを提供している。ここで注目したいのは、この夢に現れる「天国」と「基督」の描写が支那化されていることである。たとえば、夢のなかに現れた「天国」は、自分の「幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい」(二四七頁)馴染みのある風景になっている。さらに、夢で会った「基督様」も、「支那」の物を使い、何一つ不自由なく金花と話が通じていることから、その対話は「支那語」と推測できる。また、この夢の場面で、「基督」が金花に「支那料理」を「ごちそうする一齋がある。この食事の場面は神との共餐であり、金花が神と同席する資格を有する聖女の位置にいることが暗黙裡に記述されることになる。

この夢は、金花自身がみたものであるという設定であるが、テキストではこの夢の場面が金花の口からではなく、語り手によって語られていることに留意したい。「ではあの人が基督様だった」という金花の受けた啓示も、語り手によって規定され、金花にとつての「基督」を「南京の基督」と規定したのも語り手である。これは金花のみている「基督」が、あくまでも彼女自身の〈知〉の範囲を越えない「基督」であるという意味で、「南京の基督」と限定されたとみられる。それにキリストが「支那料理」を「ごちそうすることは、神の恩寵とも読める。とすると、それによって金花の梅毒は癒されたことになる。しかしその場面に「支那料理は嫌ひ」というキリストが、嫌いな料理を金花には食べさせるところに気まぐれをみることができると、この場面はきわめ

で滑稽な話で、この夢の設定には作者の意図がうかがえるが、それについては後述する。

金花の夢は語り手によって支配されているが、売春でもしなければ父親と共に「餓死」するという極限の境遇にある金花にとつて、ごちそうを用意してくれた「基督」は、彼女の頼りであり、梅毒を治癒してくれたことは、何よりの恩恵であることだけは間違いない。

金花のみにている「外国人」は、みた目に「基督」に似ていて、彼女には終始「微笑」で接していたから「親切」にみえた。しかし、彼女が普段みている外国人といえ、肥った奥さんと一しよに、画舫に乗つてゐた人」とか、「孔子様の廟へ、写真機を向けてゐた人」など、金花の境遇とはまるで違つた金持ちや観光のために南京を訪れている外国人である。また「太い藤の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つ」（二四四頁）植民地支配国という優越した立場にある外国人であつて、金花はその傲慢と横暴さを見ていたのである。

このような外国人像が具体的に金花の口をとおして語られたところにも、作者の意図があるだろう。その背景には、中国へ政治的・経済的・文化的に侵入してきた諸外国の入り交じつた南京、ひいては半植民地中国の社会状況がある。これらの外国人は、身を売つて生計を維持する金花とはあきらかに対照的な存在であり、「姚家巷の警察署の御役人」と同様、権力側に属する人物にほかならない。さらにいうと、こうした植民地的情景は、一九一〇年代当時の中国の社会状況の現実に近い。中国人と諸列強間の矛盾、社会上層の人と底辺にいる人との矛盾と隔絶などの諸矛盾をさらけ出すものであつた。先行論では、このテキストの舞台が、金花の部屋に設定されると同時に、そこだけに限定されていることから、中国社会の現実という外部とは関わりがないと指摘されてきた。しかし、以上の箇所や金花の「姚家巷の警察署の御役人」への不満から、彼女が完全に外部と関わりがないとはけつしていえない。芥川は、このような近代中国の矛盾を意識せずに、このような描写をしたとは考えにくい。

「一夜降臨した基督」は金花にとつては救世主に違いないが、これまで金花の可憐な境遇に寄り添つてきた語り手の語りに着目すると、キリストの描写はとも救世主とはみえない。なぜかという、前述した「支那料理」をめぐる金花とキリストのやりとりは、きわめて諧謔に富むユーモラスな箇所であるが、そこには痛烈な意味作用が満ちているととらえられるからである。ここで注目すべきことは、金花のような階層の者にとつては、その（無知）ゆえに「天国」や「基督」が、「奇蹟」をもたらす存在としかみえないことである。しかし、このような

夢を配置した作者の意図はけっしてそれだけではない。前述した中国の社会状況からみたとき、金花の〈無知〉を強調することによって、作者は「南京の基督」に別の意味を付与したと考えられる。

テキストで金花は「羅馬加特力教」の信者という設定になっているが、このような設定は、近代中国へのキリスト教布教の歴史と関わっている。近代中国にキリスト教の布教が始まったのは、アヘン戦争後の一八四四年からであり、その後の条約締結で教会の建設が許可されたことにより、各教団はこぞって中国内部への教化活動を行った<sup>(8)</sup>。布教を円滑に運ぶために医療伝道も拡充され、外国人宣教師による西欧医学書の翻訳・出版、および医学教育が行われ、医療伝道が精力的に進められた。一八五四年宣教師として清国を訪れたカー（嘉約翰 J.C. Kerr）の『皮膚病新篇』（Manual of Cutaneous Disease）と『花柳指迷』（Treatise on Syphilis）は、一八七四年から一八七五年にかけて刊行されたが、後者の『花柳指迷』には西洋における梅毒、淋病などの治療法などが紹介されている<sup>(9)</sup>。テキストのなかで、梅毒にかかった金花に朋輩たちが、鴉片酒や汞藍丸や迎路米という薬を勧める場面があるが、『花柳指迷』には、これらの薬の効用が詳しく紹介されている。このことから、これらの薬が、一九一〇年代の南京ではすでに梅毒の治療薬として常識化され、普及していて、当時の中国に西洋医学が深く浸透していたことがうかがえると同時に、西洋宣教師による医療伝道と関わっていることが推測できる。なお、カーの『花柳指迷』が日本に紹介されたかどうかは不明であるが、国会図書館の近代ライブラリーの検索結果によると、ほぼ同時期にカーの『原素略解』（好文書堂、一八七三年）と『西薬略釈』（澹静堂、一八七四年）などが日本で刊行されていたことがわかる。テキストにおいて梅毒に効く薬として「汞藍丸」、「迎路米」などの治療薬が設定されているところからも、作者芥川はこういった宣教師の医療伝道にかかわるなんらかの書物でこれらの薬に関する知識を得た可能性があると指摘できる。

このように、キリスト教の布教が医療伝道をもなっていた歴史をふりかえるとき、梅毒を媒介にした金花とカトリック教の結びつきが納得される。ただ、それだけではこの「南京の基督」の背景説明としては十分ではない。金花に「基督」とみられた「混血児」の関わりがとり込めないからである。さらにそれを追究していかなければならない。

十九世紀後半においても、カトリックとプロテスタントはともに、医療伝道の充実に意を用いた。カトリック

では診療所普及の方針を採り、僻地にも診療所を開設し、また孤児院や養老院の経営にも努めていた<sup>(11)</sup>。そして清国政府によって宗教布教が保護されるという好条件のもとで、キリスト教施設は次第に政治的色彩を帯びていき、宣教師らは自国の権益を代表する先兵として中国各地に足を伸ばしていった。南京もこのような状況にあった。一八九九年、南京港の開放に伴い下関も開港場となり、外国の諸領事館・商社などの進出にともなうキリスト教の浸透がみられる<sup>(12)</sup>（図①）。

ところで、「南京の基督」が書かれた時代前後のキリスト教の布教状況は、当時の新聞メディアで確認することができるが、そこでもうかがえる特徴的なことは、中国における布教活動にもっとも意欲的だったのがアメリカだったことである。

①（前略）米国の支那に於ける教育事業、病院並に救済事業、布教事業等を見るに是等は経済的活動以上の大活動にして支那思想界に植付けたる大勢力は牢として抜くべからず、（後略）（米国の対支発展（十五））『中外商業新報』一九一七年二月五日（傍線は筆者による、以下同じ）。

②山東の富源に対しては単に我が利権獲得を主眼とせず（中略）独逸の如き膠州湾の租借権を獲得するや—



【図①】アメリカ鐘楼と天主堂（現在南京市石鼓路にある）

教に新聞に投資に一致協力して独逸以上の力を見せるに日本は青島に於て格別為す所なく（中略）之を他に占取せしめんとする此事たる單に青島のみに止まらず追次支那の全部に及ばんとするにあらは頗る遺憾なりと慨せり。（『心細き山東經營策』『報知新聞』一九一八年一月一五日）

③宣教師が（中略）日本には見切りをつけて今度は支那の方に手を伸ばし頻りに運動に尽しつゝあるの支那に於ける米国の勢力は益々勃興しつゝある。然も米國に居る支那人などはいろいろ日本が支那に圧迫を加えるといふことを米人に訴える、そこへ支那が共和國となつたこと等が米國人をして同情せしめる否矢張り利害關係の打算に敏なる米人は支那人の弱点を利用して種々の計画を建てつゝある。（『戦後國民の覺悟（七）』『福岡日日新聞』一九一七年八月一七日）

これらの言説からは、一九一〇年代のアメリカが「支那」において、經濟活動以上に、キリスト教布教活動を強めていき、思想的に中國人を教化していこうとしていたことがわかる。その背景には布教活動がアメリカの「支那」における權益を獲得する上で機能を果たした礎となつたといふことがある。帝國日本がそれを憂慮している論調は、アメリカとの間の權益獲得競争と布教活動とが切り離せないことを証している。

このような南京を含む中國の實情と結びつけて考えるとき、金花が「混血児」を「基督」の降臨と錯覚した背景の文脈がみてとれよう。そして、「基督」が「支那料理」を金花に「こちそうする場面は、宗教的表象とその意味作用とは別箇のもう一つ重要な意味をもつてくる。それは餓えと病苦に喘ぐ金花に、豊かな「支那料理」を食べさせ梅毒を治癒する「基督」が、まさに「南京」に浸透してきたアメリカの布教政策と一致している。「支那料理」嫌いで「一度も食べたこと」のない「基督」は、「支那」の文化に馴染めない欧米人の表象でもある。世俗に無縁なはずの神があくまでも世俗を超えることができなかったといふことで、「支那料理」嫌いなキリストを設定したといふところに、アメリカの布教政策への皮肉と嘲笑がみてとれる。換言すれば、金花にとつての「基督」は欧米のキリスト教國と中華民國という世俗のナショナルリティを超えるものとはなりえなかつたことが、この場面からうかがうことができるのではないか。笹淵友一は「南京の基督」を「キリスト教の信仰をお伽話として批評し



たもの」<sup>(12)</sup>と指摘しているが、テキストにおける軽やかな「基督」描写は「キリスト教の信仰」というより、国家と同調していく当時の「キリスト教」の虚偽性への批判というべきであろう。そこに、金花、ひいては貧困と病苦に喘ぐ南京の下層民衆の心を、宗教的、経済的に占有しようとするアメリカとそれに同調する帝国日本の植民地政策に対する作者の皮肉を込めた表象が重ねられているといえよう。このテキストの「基督」が「南京の」と限定されなければならない意味がここにある。しかし、餓えと病苦に喘ぎ、国家の「御役人」からも救済してもらえない金花（民衆）にとつて、列強国アメリカの表象を纏わり付かせる「基督」としても、それは「無限の愛を含んだ微笑」と「優しい接吻」を与える頼れる存在なのである。このような「基督」に、金花は「美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈禱を捧げ出した」（二五二頁）と、語り手は金花を「マグダラのマリア」に喩えている。ここで語り手が「マグダラのマリア」のように金花を仕立てるには、それだけの意味を持っている。

「マグダラのマリア」は、周知のように、『新約聖書』に登場する娼婦であったが、イエスの許しをもらい更生したという伝説的人物であり、またイエスの復活の目撃者としても重要な人物である<sup>(13)</sup>。古来、「ルカによる福音書」に登場する「罪深い女」、「ヨハネによる福音書」に登場する姦通の女がマグダラのマリアと同一視されてきた。ここで語り手が金花を「マグダラのマリア」に喩えることによつて、カトリック教徒でありながら、娼婦業をする金花を罪を犯しながら、イエスに許される女として重ね書きしているといえよう。

金花に寄り添ってきた語り手は、ここに主観的判断を挿入することによつて金花の「奇蹟」の物語を相対化しているのとらえられる。キリストを生の支えとして依拠する金花のような存在を語り手は認めつつ、そこに主観的判断を下すことによつて、一方で、そのような信仰の世界と距離をおき、あくまでもメタレベルの〈物語〉として呈示していこうとする作者の戦略がうかがえる。聖書の物語が語り伝えられ、それを〈真実〉として受け止める人々がいるのと同じように、金花にとつて「南京の基督」が起こした奇蹟は〈真実〉であるということ、マグダラのマリア」に喩えて表象している。しかしその一方で、テキストで強調されている金花の〈無知〉は、その〈無知〉を生じさせた時代状況によるものであり、そこには宗教の〈真実〉に救いを求めるしかない金花、ひいては金花のような中国民衆の悲劇が映し出されてもいる。

いては金花のような中国民衆の悲劇が映し出されてもいる。

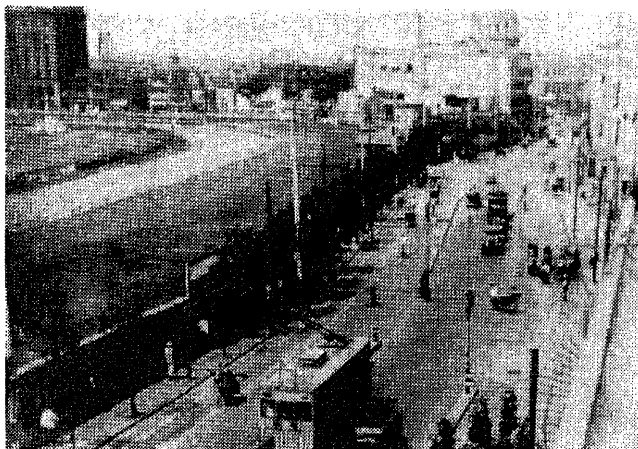
#### 四 「混血児」の発狂、その表象をめぐる

不思議な外国人に「基督」を見出そうとする金花に対して、「旅行家」は、金花の認識とはまったく相反する（事実）を暴露する。

彼は作品に二回登場する。一回目は物語が始まる年の春、「上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来」（二三七頁）て、金花の部屋で一夜を明かす。二回目は「翌年の春の或夜」、つまり一年ぶりに再び金花

部屋を訪れる。第二節でも触れたように、一回目では「羅馬加特力教」の信仰をもつ金花が売春をすることを、彼が「皮肉な調子」で問い詰めたが、売春でもしなければ「餓死」するという金花の憐れな身の上話を聞き、彼は「翡翠の耳環」を金花にプレゼントする。すなわち、彼は金花の不幸に同情する優しさをもっていると同時に、彼女のカトリック教義への知識の浅薄さゆえに、彼女の信仰の深さを疑っており、「輕蔑」の情を抱いていたことをまず押さえておきたい。

前節の金花の物語でみたように、その背景に、中華民国が列強諸国によって植民地化されているという時代状況に照らし合わせれば、「旅行家」の人物設定にも、それが関与しているとみるべきである。「旅行家」の身分は、テキストでははっきり示されることはないが、「旅行家」と規定されている以上、旅行が目的で



【図②】上海の競馬場内景（『上海近代建築史稿』）

このような彼の足跡をたどると、辛亥革命後の中華民国における資本主義文明の大量流入とともに、西洋式のレストラン及び活動写真、魔術、競馬など西洋の娯楽形式が大量に輸入されたという情況がみえてくる。こうしたものは、中国に進出してきた欧米の居留民だけでなく、中国各地の官僚、商人など上流階層の人々の娯楽となりに、これによって、直接的にまた間接的に、中国の娯楽業の発展を促進した<sup>(34)</sup>。この時期の日本のガイドブックのなかには、必ずといっていいほど、芸妓や妓院、競馬、賭博が紹介されているが、その事実をよく反映しているといえる。徳富蘇峰の『支那漫遊記』（民友社、一九一八年六月）には、「南京の見物・秦淮」「競馬」などが紹介され、芥川も中国旅行の際に参考にしたとされる。また、井上紅梅『支那風俗 上巻』（日本堂書店、一九二〇年）には、「花柳語彙」「嫖界指南」があり、そこには一九一〇年代の上海の事情が記録され、遊びの手順までが詳しく紹介されている。島津四十起編集の『上海案内』（金風社、一九二二第九版）は、一九一三年に初版が出たものであるが、上海を訪れる人の多くが、まずはじめに求めたガイドブックとされている。一九二一年、芥川が上海を訪れたとき、島津四十起が城内を案内してまわったという。この本のなかにも、「上海の花柳界」「競馬」などが紹介されている。「競馬」の項<sup>(35)</sup>では、「此の四日間の競馬日はイストホーリデーとして実に上海の一大娯楽日にして税関は半日、外人の諸会社及び日本人の重なる会社も皆休業す」であるとか、「上海の競馬日は東洋一の輸贏所と言ふ丈あつて馬の勝負よりも賭事の勝負の盛なること実に言語に絶」するなどと、上海における競馬の盛況や賭け方の詳しい方法まで紹介されている。そのほかにも、花柳界に通うための詳細な説明をしているガイドブックとしては、杉江房造の『新上海』（日本堂書店、一九一八年）や、池田桃川の『上海百話』（日本堂書店、一九二一年）が挙げられる。このように、この時期の競馬場や妓館は、「支那」の上流社会の人々だけでなく、列強諸国から訪れる人々の快楽に奉仕する娯楽施設となっていた。

テクスト内における「旅行家」（男性）が娼妓（女性）の部屋を訪れるという構図は、このような背景下で、中国人女性の性を買うことであるとすれば、それこそ列強諸国が中華民国に植民地的侵略を果たそうとする欲望を表象しているといえる。「旅行家」は、お金も払わず逃げてしまった「外国人」を、「混血児」の「George Murry」という無頼漢であると知り、金花に同情する。とはいえ、「旅行家」は、「混血児」の「外国人」と同様に金花の部屋を訪れる「お客」であることに変わりない。彼も金花をあくまでも性の享樂の相手とみなし、そのもとを訪

れている点では、「混血児」の「外国人」と変わらない。その意味で、「旅行家」と「混血児」、そして娼婦との関係は、当時の帝国日本、列強アメリカと中華民国との〈支配／被支配〉関係の表象ともとられる。

このような構図は、「旅行家」が二回目に金花の部屋を訪れたときにもみられる。そこで彼は、金花から「一夜南京に降った基督」が彼女の病を癒したという不思議な話を聞かされる。しかし、金花がみたと思じた「基督」は、実は「日本人と亜米利加人との混血児」の「George Murry」(二五二頁)であつたという〈事実〉の伝聞が、「旅行家」の心内語として語られる。彼は金花に「蒙を啓いてやるべき」かどうか躊躇した結果、なにも言わずにいた。「蒙を啓いてやる」という言葉から、自分のほうが、金花を啓蒙する優位な立場に立っていると思つてのこと、さらに、自分が把握している情報こそ事実だと信じて疑わない彼の姿勢がうかがえる。

このことについて先行論では、「旅行家」が把握している「外国人」の正体こそ事実であると認めているものが多くみられる。その推論の根拠は、この「旅行家」に作者芥川の分身、あるいはその代弁者の視点が付与されているからということ、さらに、第一節であげた南部修太郎の評価に対して、芥川が送った二通の書簡で、「旅行家」が金花に対してとつた態度について説明がなされているからということである。そしてそこから「理性的に生きること、それがたとい迷信であるとしても、信じ切つて生きること、はたしていずれが人間にとつて幸せか」という芥川の懷疑<sup>(7)</sup>を読みとる論が導き出されてくる。つまり、迷信が科学かといった二者択一の論である。たしかに、このテキストの内容には、リアリズムを唯一の科学的真理と信じる態度から読んでいくと、そのようなテーマが含まれていることは認められる。

しかし、このテキストが、このようなテーマに支えられているとすれば、「南京」を舞台にした意味がなくなる。日本と日本人を舞台としても、〈事実／迷信〉がそのまま〈幸福／不幸〉につらなるといったテーマは読みとれるはずである。しかしその〈読み〉は当時の中華民国がおかれた半植民地的状況をまったく捨象した〈読み〉である。本稿の立場は、この作品が「南京」を舞台に設定したこと、そこに「旅行家」の物語を配置したところに意味があり、その構図に寓意化された当時の日中間の政治的・外交的關係を抜きにしては意味をなさないということである。芥川の批判精神は「旅行家」の姿勢と態度に、帝国日本や欧米列強と中国のあいだの〈支配／被支配〉関係から生まれる〈優／劣〉、あるいは〈知／無知〉、〈開明／蒙昧〉を価値的に二項対立化し、大陸侵略を正

当化する帝国日本の恣意性を意識的かどうかはともかく、作品に含意させているとみたい。

「旅行家」の把握している〈事実〉も、あくまでも「おれの知り合ひ」から聞いた話で、みずからみたことではない。「得意らしく話したさうだ」、「事によると……伝染したのかも知れない」という「旅行家」の不確定な心内語から、彼が把握している〈事実〉は自身の主観判断によるものにすぎないことがわかる。それは、「基督」によって起こされた「奇蹟」が、「真実」であると信じるのと同程度程度の妥当性しかもたない。越智幸恵は作品内に唯一の〈真相〉はなく、二つの物語が並列していると指摘<sup>(18)</sup>するが、本稿もそのような立場を支持する。「旅行家」の一見科学的事実にもとづく見方は、金花の語るキリスト降臨のファンタジーに比べてもけつして優位なものではなく、彼と金花の物語は平行関係におかれている以上、等価値にあり、どちらが〈真実〉であるかは問題にならない。言い換えれば、両者による二つの物語は、両者にとってはそれぞれに〈真実〉であるといえる。

ただし、本稿で考察してきたのは、このテキストが執筆された当時の中国の時代情勢との関連である。すなわち、二つの物語に共通しているものは、その背景にいずれも中国の社会状況が反映されているということである。

たとえば、金花のキリストへの信仰心は、前述したように、幼少期からの信仰という理由以外に、諸列強の支配による中国の動乱の社会様相がもたらした諸矛盾から必然的に育まれたものと言うことができる。社会の底辺に属する金花は、現実何一つ頼れる存在がなく、結局は、宗教に希望を託したのである。しかも、それは植民地主義列強国の文化侵略の一環としてもたらされた外来宗教であり、そこに頼らざるをえないという点に屈折した心情をみるべきである。「旅行家」のまなざしにしても、帝国日本の優位性に支えられており、被植民地の憐れな少女を見下す立場にある。

テキストと中国の時代状況との関連といえば、「旅行家」による〈事実〉が「George Murry」をめぐる背景と結びついているということが指摘できる。なぜ、「南京」という舞台上に登場するのが、単に外国人ではなく、「日本人と亜米利加人との混血児」でなければならなかったのか。「George Murry」は、金花がみた「基督」とは違う不良の外国人であっても、あえて「日本人と亜米利加人との混血児」と設定したのは、中国の時代状況に鋭敏になっている作者の意図によるものであり、それがそのまま作品テーマにも関わると本稿ではとらえたい。

「George Murry」は、「日本人女性とアメリカ人男性との間に生まれた子として設定されている。この設定につい

て中村三春は次のように指摘する。

恐らく、脱亜入欧的な近代日本の西洋に対するコンプレックスの凝縮されたイメージが、この混血児が金花を欺き、犯すという叙述には認められる。コロンビアな欲望が、ジェンダーの領域に投影されるのである。

まず、日本と亜米利加という列強が集合して中国を植民地化（娼婦化）している図である。また、先の想像を援用するなら、そこには、日本と亜米利加との関係は対等ではなく、日本の追従性に対する自嘲も付加されることになる。<sup>10)</sup>

この指摘は鋭く、本稿もそれに賛同する。確かに、「混血児」の表象と、彼に犯される金花の造型に、一九二〇年代前後の日本・アメリカと中華民国の間の国際政治的なパワーバランス、すなわち植民地主義帝国と被植民地の社会的コンテクストを読ませようとする作者のねらいがあったとみられる。ただ「混血児」が発狂してしまうという〈病〉の寓意については、中村を含めた先行研究の言及はなく、本稿はそれを含めてテクストと〈外部〉のコンテクストの相関を追究する。すなわち、前で触れたような中華民国での権益をめぐるアメリカと日本の衝突あるいは連携関係、力関係を作者芥川が、「混血児」に喩えているとみられる。しかし、「混血児」が、金花の性を買ったあと、お金も払わず逃げてしまい、結果的には、悪性の梅毒で発狂してしまう。「混血児」が、一九二〇年前後の日米関係の表象とすれば、それに「発狂」の結果を付与した作者の意図はなにか。

梅毒はコロンブスのアメリカ大陸発見以降、他民族征服という歴史的過程で、猛烈に西欧世界に伝播していったとされている。この歴史のパラドックスが、植民地主義によってもたされた皮肉な結果であることは、梅毒の知識や歴史に詳しい芥川が知らないはずはない。<sup>11)</sup>「混血児」の発狂という結果を配することによって、アメリカなど西洋文明国とそれに追従する帝国日本の中国侵入（文明化）への憂慮、その結果として、梅毒などといった姿なきものに植民地主義国家の運命を暗示させることによって、同じく植民地帝国をめざす日本国家の運命が左右されることの危険性を示唆しようとしている。これは当時大阪毎日新聞社のジャーナリストとして活躍していた芥川の批判精神が生んだ時代警鐘の寓喩といえよう。そしてそのまなざしは、植民地主義によって文明化され

ていく中国が抱える問題への関心、また国家の運命に左右される無数の個人の運命への関心にも向けられている。その姿勢は、「南京」の底辺社会の一隅に生きる娼婦の宋金花の物語に寄り添って描いてみせるところからうかがえる。とはいえ、その一方では、「文明化」を表象する科学的合理性を求める「旅行家」にも寄り添っている。「旅行家」が自分の把握している《事象》を金花に告げるかどうかの躊躇は、「旅行家」の金花への「慇懃」と「憐憫」という相反する感情から発していることはすでにみてきた。「慇懃」の姿勢が、テキストの《外部》にある帝国日本の性的・文化的支配の表象につながるとすれば、「憐憫」のやさしさには、そのような帝国の欲望に対する反感、皮肉を読みとれなくもない。そこに、ジャーナリスト芥川の、自国（日本）及び他国（中国）、そしてその両方の運命に注がれているまなざしが感じとれる。

## 五 おわりに

「南京の基督」は、これまでの先行研究でも指摘されてきたように、「現実／理想」、「真実／理念」、「幸福／不幸」などの対立する諸要素が同時に存在し、どちらが優位にあるというのではなく、その二項対立的な枠を生んだ時代状況のありようのなかにこそ、以上のようなテーマが混在している姿を呈示したテキストである。

そして、このようなテーマは、「南京の基督」の翌年に書かれた「奇怪な再会」（『大阪毎日新聞』一九二一年一月五日～二月二日）にもみられる<sup>91</sup>。すなわち、両作品とも、一九二〇年代前後の欧米諸国と帝国日本による政治的・文化的争奪戦のなかで、植民地主義国家（男によつて表象される）によつて左右される「支那」人女性の運命を描いたテキストであること、そして価値観を二項的に対置することによつて、二項対立の枠でものをみる人間の偏狭な認識と、それを生んだ帝国主義への批判が込められている。時代のコンテキストをとらえる芥川のジャーナリスティックなまなざしが、寓喩に変化をもたせながらも、共通する主題を追及させたということである。

## 注

- (1) 本文が用いるテキストは『芥川龍之介全集 第六巻』(岩波書店、一九九六年)による。
- (2) (一九二〇年七月一日付) 僕等作家が人生から *Odious fun* を掴んだ場合その曝露に躊躇する気もちはあの日本の旅行家が悩んでゐる心もちと同じではないか君自身さう云ふ心もちを感じる程残酷な人生に対した事はないのか君自身無数の金花たちを君の周囲に見た覚えはないのかさうして彼等の幻を破る事が反つて彼等を不幸にする苦痛を嘗めた事はないのか。
- (一九二〇年七月一七日付) 金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだからいくら君が治るものかと威張つても治るのだから仕方がない。
- (3) 完治とする論の代表的なものとして、三好行雄「地底に潜むもの——『南京の基督』」「芥川龍之介論」筑摩書房、一九七六年)、海老井英次「芥川文学作品論事典『南京の基督』」「三好行雄編『芥川龍之介必携』一九七九年」などの論がある。潜伏とする論として、鷺只雄「『南京の基督』新攷—芥川龍之介と志賀直哉」『文学』一九八三年八月)、笠井秋生「『南京の基督』——二通の芥川の書簡をめぐる」『キリスト教文芸』第二巻、「キリスト教文芸」編集委員会、一九八四年一月)、栗栖真人「芥川龍之介『南京の基督』論」『別府大学紀要』(二五号、一九八四年一月)の論がみられる。
- (4) 西山康一「『幻想』／『迷信』としての中国——芥川龍之介『南京の基督』における〈科学〉と〈帝国主義〉」『文学』第三巻第三号、二〇〇二月五月。
- (5) 大木康『中国遊里空間——明清秦淮妓女の世界』青土社、二〇〇二年、八頁。
- (6) 関口安義『この人を見よ——芥川龍之介と聖書』小沢書店、一九九五年、一一九頁。
- (7) 单光輝『中国娼妓——過去和現在』法律出版社、一九九五年。
- (8) 鄧鉄涛、程之范編『中国医学通史 近代卷』北京、人民衛生出版社、二〇〇〇年、四三四頁。  
<http://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/MICRO/chorouha.html> (二〇〇六年二月二日確認)の「英国長老派教会中国伝道記録」をも参照。
- (9) 同書、四三四頁。
- (10) 日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、一九九一年、一六一頁。
- (11) 張在元『中国都市と建築の歴史』鹿島出版会、一九九四年、五五頁。
- (12) 笹洲友一「芥川龍之介のキリスト教思想」『国文学 解釈と鑑賞』第三巻第七号、一九五八年八月、一一頁。
- (13) ビーター・カルヴォコレッシ『聖書人名事典』佐柳文男訳、教文館、一九九八年、一三一頁。
- (14) 王書奴『中国娼妓史』上海、上海三聯書店、一九八八年。



- (14) 王書奴『中国娼妓史』上海、上海三聯書店、一九八八年。
- (15) 和田博文『言語都市・上海——一八四〇—一九四五』藤原書店、一九九九年、一五六頁。
- (16) 島津四十起編『上海案内 第九版』金風社、一九二二年、三八二—三八五頁。
- (17) 駒尺喜美「南京の基督」『芥川龍之介研究』八木書店、一九六九年、一〇五頁。
- (18) 越智幸恵「芥川龍之介『南京の基督』論」『玉藻』第三二卷号、一九九六年三月、一二七頁。
- (19) 中村三春「混血する表象——小説『南京の基督』と映画『南京の基督』——」『日本文学』日本文学協会、第五一卷第一一〇号、二〇〇二年一月、一七頁。
- (20) 芥川が梅毒の知識に関して詳しく、泌尿器医学面の書類を調べた痕跡があることは南部宛の書簡の内容からうかがえる。また芥川の精神科医であつた斎藤茂吉は、ウィーン大学で梅毒のマラリア療法の創始者ワグナー・フオン・ヤウレックに学んだ経歴があり、神経梅毒の専門家であつた。また先輩の木下玄太郎は、日本における皮膚病・梅毒学の開祖である土肥慶蔵の弟子であり、東大で梅毒学を講じたことがある。この二人から梅毒に関する知識を獲得した可能性もある。
- (21) 「奇怪な再会」については、拙稿「芥川龍之介「奇怪な再会」——隠喩としての狂気」『日本語と日本文学』第四二号、筑波大学国語国文学会、二〇〇六年二月を参照。

# 図版出典

- 【図①】張在元<sup>テ、ウサイゲン</sup>『中国都市と建築の歴史』鹿島出版会、一九九四年、五五頁
- 【図②】陳從周<sup>リン、フウシウ</sup>、章明編<sup>ショウ、メイ</sup>『上海近代建築史稿』上海、上海三聯書店、一九九〇年、一九七頁